

語学教育のあり方について （＜特集＞大学の語学教育を考える）

著者	弦間 洋
雑誌名	筑波フォーラム
号	57
ページ	38-40
発行年	2000-11
URL	http://hdl.handle.net/2241/8391

語学教育のあり方について

弦間 洋

農林学系助教授

最近の話題

大学生の学力、特に外国語能力の低下、2002年度からの小学校での英語教育の導入など語学教育に関する話題、さらには今後、小中高で実施される文部省新学習指導要領では「生きる力」や「ゆとり」が強調され、「総合的な学習」のカリキュラム設定など教育改革に関する話題が喧しい。昨今の初等、中等教育の話題は、豊かな人間性をはぐくむべき教育のあり方に集中し、また一方では国際化、情報化等の今日的、社会的変化への教育の対応も問われている。最高学府たる大学ではもちろん、教育の目的・要領は初中等教育とおのずから異なるが、これらのキーワードは看過できない重要な要素を含んでいることは確かである。本学では、建学の理念として変動する現代社会に不断に対応しつつ、国際性豊かにして、かつ多様性と柔軟性をもった教育機能、及び運営の組織を開発すると謳っ

てい、語学教育に対しても先取の取り組み、例えば外国語センターの開設などを行ってきた。ところが大学設置基準大綱化以降、取得単位数の減少やカリキュラムの独自性を標榜する声に圧され、ある学類では語学教育の単位数が事実上、減少してきている。この点については、今年2月に答申された大学改革委員会、外国語センター問題検討専門委員会報告にその経緯が詳しい。

本学の語学教育

英語教育に限って言えば、English for General and Academic Purposes (EGAP) 及び English for Academic Purposes (EAP) を一般（共通）外国語の「一般語学」に当てはめ、主として外国語センター教員が担当し、English for Specific Purposes (ESP) は「専門語学」として位置付けて、当該専門分野の学類、学群教員が担当するシステムで新構想大学における語

学教育先取のシステムであった。しかし、前述のように「専門語学」は本来の一般外国語、すなわち語学教育の枠組みから外れて、専門科目あるいは専門基礎科目として取り扱われることになった。このような経緯は案外、学類、学群教官の間でも認識がなく、あるいは既に風化してしまって、語学教育の現場の教官と温度差があるのが実情のようである。事実、私も本学に赴任して長くなるが、一般外国語としての農林学類（現生物資源学類）の語学カリキュラムも、現在の生物資源学類の専門科目としての「専門語学」も本質的に変化していないように見える。農林学類当時、ESPを如何に教授するか、プロパーでない者が授業計画や実施について腐心した生々しい記憶がある。思いは現在でも同じである。

学類の専門語学

本学類では同様の名称で、つまり「専門語学」の授業は2年、3年次にそれぞれ3単位、計6単位配当されており、全学的な科目配当の変化の中、取り扱いが異なっただけで、前述のように「専門語学」はそのままの形で開講され続けてきたのである。然るに本学類に限って言えば、語学教育の単位数の減少とか、一般（共通）外国語から専門科目へのシフト

が学生の外国語能力低下の要因とは考え難く、もし能力低下を大学教育のカリキュラムの問題に起因するとすれば、かつての「専門語学」を一般外国語として開設したその時点から問題は萌芽していたきらいがある。これは共通的な事項として他学類にも及ぶ話であろう。対処策は報告にあるようにEGAP修得の後、ESP学習の基礎となるEAPの開講である。これは報告では旧専門語学相当とあるが、前述した本学類のように従前と本質的には変わっていないケースもあるので、全く新しい視座で開設するのを感じる。何度も繰り返すが語学教員でない学類、学群の担当者は授業のあり様に戦々恐々である。EAPたる授業を目指すにも幾多の障害があり、なかなか旨く行かないのが実情である。そのひとつに教官自身が語学の専門教育を受けていないことが挙げられる。世間には語学の達人と称され、数カ国語に堪能な奇特な方もおられる。しかし、Indo-European familyに属する言語を母国語とする人間が、その範疇で数カ国語を覚えるのは比較的容易であるが、Ural-Altai familyの日本語を修得するのは特段の努力を必要とするであろう。逆の真理も当然ありえることである。私事で言えば日本語以外の語学の素養は、幾たびかの海外渡航経験での

学習、あるいは馴染みに基づく些細なものに過ぎないので、体系づけられた語学教育を担当するのは非常に面映いものがある。一方、留学生の指導や海外の研究者との情報交換など専門分野に特化した部分での意思の疎通は、ほとんど大過なく行い得ている。もちろん、留学生自身の日本語修得の努力に依存するところも多いのだが。

望ましい語学教育

以上のような理由から、EAPとしての「専門語学」のための教授法や教材が、今後事実上、語学教育の総括的機関、外国語センターから円滑に教示、提供していただけることを願っている。また当該専門分野に特化したESPは、その時初めて担当教官も受講学生も満足な成果をもたらす科目として成立する。もちろん、教官も語学力向上のため不断の努力を続

けることは言うまでもないし、論理的な文章の作成能力や試験・調査の分析能力にも磨きをかけねばなるまい。このことは科学論文の作成には、日本語、外国語の如何に関わらず必須なことで、大学生の語学力低下の要因をここに求める意見もある。確かに学生の海外志向は多く、留学、遊学、ボランティア等積極的に異文化体験をする数は増加している。だとすればEAPやESPの必要性が益々認識されるであろう。学類の外国人教師に望ましい「専門語学」とは何か、どのようにしたら良いかを問うたことがある。答えは、「難しいがネイティブスピーカーによるESPの教育」であった。おっしゃる通りで難しい。語学の体系的素養のない私は益々悩み、「生きる力」や「ゆとり」に事欠くことになる。

(げんまひろし 果樹園芸学・園芸利用学)

